

オリジナル排泄小説誌

朝のうんちを済ませ損ねて大ピンチ！  
少女を襲う朝の日課＝超強烈便意！

朝のうんちはガマンできないっ！

試し読み版

18禁

成人向け





## 朝のうんちはガマンできないっ！

### 目次

1. 完璧少女と朝の快便、せめぎ合う時	..... 06
[小説:AJ 挿絵・口絵:うのると]	
2. 二人の少女 すっきりの朝／むずむずの一日	..... 32
[小説:AJ]	
3. 下痢という名の日常、朝の非常事態	..... 48
[小説:AJ 挿絵・口絵:麦茶]	
あとがき	..... 68
奥付	..... 72

# 完璧少女と朝の快便、せめぎ合う時

藤室依乃里の朝は今日も順風満帆なものだった。

七時間半の睡眠を取り、目覚ましを五秒と鳴らすことなく起床。自室の窓から思い切り日の光を浴びればまどろみは残らない。排尿と洗顔を手早く済ませた後、自室に戻り身支度を始める。

姿見に凜とした少女が写る。目眉整った依乃里の顔立ちには十四を数える齢に比して大人びたもので、伶俐かつ涼しげな雰囲気が多くのを惹き付け得る。事実、女子校でありながら、これまで数人の同級生や後輩から恋い慕われ告白を受けたことがあるほどだ。

縫製の整ったパジャマを脱ぎ、晒した肢体もまたクールな美少女という印象を補強する。百六十五センチメートルの長躯であり四肢は筋肉質で引き締まっではいるが、それでいて細身ではなく程よく脂肪もある均整の取れた肉体であった。臀部と胸部に見える女性的な丸みも、派手さはないが、決して控え目ではない。

纏った制服たる濃紺のセーラー服は、ただ依乃里のためにあると錯覚するほど完璧に調和していた。上質な厚手の生地が用いられ、清楚と美麗を表現して止まぬその制服は、有数の進学校として知られる中高一貫女子校のものであり、依乃里が選ばれた一握りの秀才であることを意味している。無論、その着こなしには一片の疵もない。青色のスカーフが曲がることも、膝丈のプリーツスカートに皺が付くこともあり得ず、小さな糸くずですら皆無である。

続いて着替えの流れで髪の設定も行う。櫛とヘアアイロンを用い丁寧に整えられ流されたセミロングの黒髪はいつも艶やかに輝い

ている。これも誰もが羨むところであった。

「おはよう、お母さん」

身支度を終え、依乃里は朝食の食卓につく。大きなダイニングテーブルに並ぶ食器類は華美ではないが上質なもので、藤室家の経済的豊かさを物語る。そのうち彼女の席には、二枚の厚いトーストと大盛の生野菜、コンソメスープに卵二つ分のスクランブルエッグとソーセージ、そしてブルーベリージャムを掛けたヨーグルトが並んでいた。十四歳で中学二年生の少女が摂る朝食としては多めだが、これも彼女の日常である。恵まれた体躯に加え、週四日は部活動でテニスに打ち込むゆえ活動力は多く、代謝も良好な依乃里にとって、むしろこれぐらいの量がなければ、昼食の時間を待たずして腹の虫を鳴き始めるのだから仕方がない。

もちろん用意された朝食は残すことなく平らげる。朝食とその後歯磨きを終えた依乃里は、リビングでゆったりとした時を過ごすのがお決まりだ。紅茶を煎れたティーカップに口を付け、TVのニュースに目を遣りつつ、学校での予定を頭の片隅に置く――容姿から誤解されることも稀にあるが、依乃里の性格はおおよそ穏やかなもので、漂う品の良さも手伝って友人には恵まれている。相応の選抜を経た同級生たちの中でも殊に優秀で、といって学業ばかりに打ち込むことなく部活動においても学級活動においても存在感を示す彼女は誰からも一目を置かれる存在だ。無論、相応の努力はしているのであって、その努力を怠らない限り、今日も明日もその先も彼女の理想的な日常は続くだろう。そんな一日を控えつつ、早起きの依乃里に許される落ち着いた時間が流れていく。



ぐるるる……つ きゆるるるる……くるるるるつ

そして食事を終え十分。依乃里を笑顔にした色とりどりの食物を消化しようと胃が揺れ動き、その蠕動が消化器官の末端たる大腸に伝わる頃である。そうして日々の摂食の成れ果てが、波打つ腸壁に乗って運ばれ、目指すべき出口の扉を叩いていた。

(今日もちょうど十分。いつもどおりの時間ね)

その時、依乃里はカップ一杯の紅茶を飲み干したところであった。むしろこの食後十分に合わせて飲み干しているくらいがある。それだけ依乃里の健全で健康な体は規則正しく、習慣に規律されていた。立ち上がり歩く姿は背筋が伸び、どこか自信と自負を感じさせる。傲慢さはなく上品ではあるが、さりとしてご令嬢だとか箱入り娘とか、そういった枠には収まらぬ堂々とした歩き方である。目指す場所が自宅であるマンションの御不浄——便所であることなど微塵も感じさせなかった。

この朝、既に依乃里は起き抜けに濃い小水をたっぷりと便器へ注ぎ、膀胱は空になっている。食事中的ミネラルウォーターと食後の紅茶は間違いなくこの貯水を加速させるであろうが、まだその時ではなく、つまりトイレを訪れる用事は排尿であるはずがない。そして今はたっぷり食べた朝食後。それならば答えは決まりきっている。(うんち、したくなってきた……うんちする。トイレ)

端的に言って依乃里は便意を催していた。この凜として清潔感に溢れる少女とて、濃紺のセーラー服と柔肌の下には消化の器官があり、食べ物の絞りがすを大便として出すことになる。どんな少女も排便という営みは決して避けては通れない。依乃里もまた臭い立つ

茶色の汚穢——うんちと無縁ではられない。

ぐるぐるきゆるるる……つ ぐううぐくくるるるつ

(今日もいい感じにお腹が動いている。いつもどおり、だね)

それどころか、依乃里は毎日必ず大便をする。毎朝の食後には決まって大便がしたくなる。規則正しく行われる朝のルーティンに、排便は欠かすことのできない一部として組み込まれている。苦勞せずとも健康的なうんちを出して毎朝すっきりできる。そんな至って健康的な快便体質を依乃里は持ち合わせていた。

殊更意識することもない。それぐらい依乃里が朝に大便をするのは当たり前のこと。活発に蠕動する消化器官に急かされ、一日分といえどしつかり詰まった内容物の重みを感じながら扉の前に立つ。

想像どおり施錠はされていない。父親の勤務先は始業時間が遅めであるため、妹は近所の小学校に通っているため、この時間に起きているのは母親と依乃里だけ。それゆえ大抵は待つことなく、お腹に素直に用を済ませられる。

だから抵抗なく扉は開く。そこは白色と木目調のデザインが織り成す落ち着いた空間で、当然のごとく清掃も行き届き、不浄という言葉が不相応なほどに衛生が保たれている。その徹底ぶりは、手洗器の水栓金具が磨かれ光り輝くほどだ。そしてこの場の主役である洋式便器は清潔感ある純白の陶器であって、蓋は近付けば自動で開く。上質の空間に調和するタンクレス型のそれは、便器らしからぬ洗練された造形をしていた。

静かに扉が閉ざされ鍵が掛かる。便器に背を向けた依乃里は、そつと淑やかに濃紺のスカートを捲った。膝丈のそれを脇に挟みつ

つ、レースのあしらわれたショーツを降ろす。布擦れの音が響かぬほどに上品な所作で熟れた双丘を露わにすると、ゆっくりと腰を落として便座へと腰掛けた。その姿すら依乃里は様になっていた。背筋を伸ばし座るその様は、ここがトイレであり、依乃里が便器に尻を向けている事実すら忘れさせかねない優美があった。

「……んっ、ふっ、んん……っ」

しかし依乃里は大便をするためにここに居る。朝食の刺激で力強く蠕動するお腹に誘われ、微かに声を漏らしながら依乃里は息む。この瞬間ばかりは、怜悯な相貌も崩れるようで、真剣な面持ちとも微笑みとも異なる神妙な表情は、まず他人に見せるものではないだろう。

(うんち降りて来てる……そろそろっ)

「ふっ……っ……ん、んうっ」

少女の秘密は更に加速する。結んだ唇の奥から零れる声は、より一層甘くなり、熱を帯び、膝の上に重ねられていたはずの両手がつの間に握り拳を作っていた。

みち、にち、にちち……っ！

そして響く粘ついた音が始まりの合図だった。肉壁を内側からこじ開け、汚穢に満ちた茶色の塊が姿を現わす。ここまで進めばもう止められず、臭い立つ汚物が依乃里の腹腔から這い出てゆくだけ。塊の自重と籠もる腹圧が相まって、瞬く間にそれは勢い付いた。

「んっ！ うん……っ！」

(あっ、出る……っ！)

にちにちにちみちみちちちちぶりぶりっ——

そして茶色が力強く溢れていく。硬すぎず軟らかすぎずの健康便が依乃里の尻穴を開け上げ伸びていく。そこには平素備えた優美も高潔もなく、ただただ依乃里は身を強張らせ大便をひり出していく。そして、

——ぶりぶりりりりみちにちにちちちっ!! どっぼんっ!!

重たい水音が響く。依乃里の「成果物」が封水に沈み鎮座する。

見るからに重そうで、彼女の親指と人差し指で作る輪っかほどには太く、長く途切れず伸びたそれは時に熟れたバナナにも例えられるが、これは紛い無く大便である。漂うツンとした発酵臭もそれを証する。洗練された上品な所作を崩さず、一步自宅の外に出れば常に清廉と清楚を誇る依乃里とて、秘密の空間たる自宅のトイレでは、毎朝こんなご立派なものを出してしまうのだ。その平仮名三文字を口にするどころか頭の片隅に浮かべていることすら傍目には想像できぬ美しい少女とて、ここでは大きな便塊を産み落とし頬を綻ばせる生の人間である。

「っ……はああ……」

(うんち………大きいが出た)

自宅のトイレならば「すつきり」の滲む吐息を漏らすことも許される。とはいえ背筋は伸びたままで、制服の乱れすらないのはさすがと言うべきだろう。

(まだお腹むずむずしてる。まだうんちしたい。もうちょっと……) 肥え太った一本が出たが、それでも依乃里の直腸には未だ糞便が残っている。下腹の内で渦巻く便意が、依乃里を捉えて離さないから、それに身を委ね応えるしかない……凜然とした少女のその体が



またも弛緩から緊張に移ろう。つまり乙女の秘密はまだ終わらない。

「ん、んっ、んん……うんっ……ふっ」

にちにちに……むりむりりりぶりぶりっ!! ぽちゃんっ!  
むりむりゆみちちちっ、みちみちみちちちっ!! とぼんっ!

欲求を満たす快を表情に映しつつ、依乃里が切なげに息む。込められた腹圧で便塊は直腸から括約筋へ。茶色の擦過音を撒き散らしたかと思えば、すぐに小気味よい水音が後を追った。立て続けに着水した二本は、最初の太物よりは小ぶりながら、芯の詰まった一塊であって、依乃里のお腹が元気で健康な証拠である。

「んっ、ふうう……」

そんな快便に相応しく、依乃里は穏やかな表情でほっと一息。便器に埋まる双丘の直下には、滑らかな健康バナナうんちが三本。この時点でたっぷり出せたと言って差し支えはない。少女の秘めたる朝の日課として十分な成果がそこにはある。

「んーっ……ふ、んんっ。う、ん……っ」

にちにちみちにちにちにゆるるるっ——

けれど依乃里は、まだ不満足と言わんばかりに踏ん張りを続ける。

(今日も……いっぱい出る……まだ出る……っ)

昨日も一昨日も変わらずたくさん食べたから、この営みはそう容易には終わらない。終われない。

「んっ、んうう……っ!」

——むりむりゆりゆっ! みちみちみちむりりっ! ぽちゃんっ  
排泄孔が出るものは、先よりも細めかつ軟らかめに。色は少しばかり明るい黄土色に移ろう。とはいえ繊維質な見た目のそれは、

はつきり形のある健全なものだ。

「んっ……はあ……んんっ、ん。うんっ……!」

ぶりぶりにちちっ とぼんっ ぶりゆにゆるるるっ! ぽしや  
むりむりむりゆりゆ ぽちゃん にちにちにちっ! ぽちゃん

そうして小さな空間は依乃里でいっぱいになる。依乃里の老廃物が肉壁を擦る音。跳ねる水の音。控え目ながらも頑張りが伝わる吐息。むせ返るような便臭。それら全てが、憂うことなく思いっきり大便をする依乃里のもの。

みちにちちち……にゆるるるぶりぶりっ! ぽちゃん、ぽちゃんっ

肛門括約筋が何度も膨らみ開いて大便が産み落とされる。何度も何度も依乃里の尻は生理現象たる行為を繰り返す。その快便ゆえに便器の封水はもう依乃里のうんちで溢れかえるほど。

「うう、んっ……うんっ、うんん……っ!」

ぶりみちにちにちっ! むりゆぶりりりりっ! どぼんっ!

丸々三分は出し続けただろう。そう苦勞なく排便ができるはずの快便体質なのに、何度も何度も息んではひり出し続けた。

「っ、はああ……」

(ふう……うんち、全部出せた。すっきり)

そこまでしてようやく便意が消え失せる。相貌は依然落ち着き払って、しかし僅かに綻び緩む表情がきもちいいを映して止まない。今だけは、朝のうんちができてすっきりな女の子。

余裕を持った朝のスケジュールであるから、十数秒ばかりは余韻に浸るのも許される。そうやって落ち着いてから、依乃里は壁面に配されたボタンを指で押し、温水洗浄便座を起動した。柔らかな水

流に尻の穴を洗われること約十秒。すっきりキレイのいい快便ゆえに、水気を拭う紙に茶色は付かなかった。

ショーツを上げ、セーラー服のスカートを元に戻し、依乃里は便器を見下ろした。そこにはたつぷり健康的な大便が積み重なっている。みっちり詰まった太いものから細めかつ軟らかめのものまで、今日も依乃里はたつぷりと出せた。きもちよく朝のうんちができた。

センサーによって水は自動で流れる。それが確実に行われることを見届けつつ蓋を閉じる。そして傍らの手洗器で手指を清め、廊下に戻る。その毅然とした立ち姿は、ほんの数十秒前まで便器に腰掛け大便をしていたことなど微塵も感じさせなかった。

「あ、お姉ちゃん、おはよう」

「おはよう舞佳」

依乃里がこの朝の日課を済ませる時間帯に、妹である舞佳も起きてくるのが常であった。四つ年下の小学四年生であって、まだ幼げながらよく整った知的な雰囲気をした顔付きは、依乃里との血の繋がりを感じさせる。

「……入る？」

「うん、寝起きだし。においは我慢する」

換気扇は回しているが、まだ依乃里の振り撒いたその残滓は残っているに違いない。そこに思うところがないわけではなかったが、敢えて指摘されると多少なりとも気恥ずかしさもあるが、そこは姉妹であって家族だから許容範囲内。

「仕方ないでしょ。嫌ならもっと早起きして」

「でも、お姉ちゃんぐらい背は伸ばしたいし、いっぱい寝ないとい

けないもん」

程々に姉妹のやり取りをして、登校までの残り五分ほどを穏やかに過ごした後、依乃里は自宅を発つ。もちろんすっきりとしたお腹ゆえに足取りは軽い。

＊ ＊ ＊

どこを切り取っても依乃里は完璧な少女である。都心部の落ち着いたオフィス街に位置する、選ばれた少女たちのための学び舎において、彼女は多くの者に慕われ、また憧憬を一身に集めて過ごす。有数の進学校ゆえその門は狭く、周囲も優秀で聡明な少女たちばかりであったが、その中でもなお依乃里の存在は特別であった。

高レベルかつ進度の速い授業もそつなく理解し、休み時間には彼女へ教えを乞う同級生があるほどだ。無論、試験の類いで常に最上位層にあるのは言うまでもない。それでいて部活動での鍛錬も怠らず、大会でも優秀な成績を残している。友人と楽しげに話す間も、常に上品かつ淑やかで、しかし気取ることなく高貴が鼻につかない。黙っていれば冷徹に見えなくもない容姿ながら、その実よく微笑み、また誰とでも穏やかに話すために、そのある種の意外性に心を奪われる者も少なくないという。

だから依乃里自らのめりにならずとも、常にグループの中心に居る。悠然と廊下を歩けば慕う者が付いてくる。まるで彼女がかくたる立場にあることを運命付けられたように、それが当たり前日常だった。自然と万人が彼女を認め後押しする。それは周囲に推さ



れ一年次に生徒会役員となり、次の選挙では会長当確と言われていることからも明白に示されている。

今日も非の打ち所のない一日だった。明日もまたそうだろうと、誰もが確信している。決して驕らぬ依乃里自身とて疑わない。それが綻び崩れることなど想像だにしていない。

＊ ＊ ＊

依乃里の朝は今日も順風満帆なものとなるはずだった。

規則正しく睡眠は七時間半と決めていて、それゆえ布団の誘惑に縛られることなく爽やかな目覚めを迎えるのが常であって、カーテンを開き日差しに包まれ彼女の一日が始まる。洗顔を済ませ、そしてこの朝一度目のトイレに赴き、膀胱にたっぷり溜まった一晩分の熱水を解き放つ。大小腸の本格的な目覚めには至っておらず、便意はまだなく排尿だけを済ませて水を流す。

身支度の風景もまた普段と変わらない。濃紺のセーラー服は、依乃里という少女を飾るに相応しく、膝丈のスカートも、アクセントとして存在する空色のスカーフも、ここでは依乃里の清楚と美麗を飾るためにある。

しっかりと眠り、肌のケアも欠かさず、端正かつ伶俐な容貌は揺ぎようがない。その瞳の力強さが、美しいだけには留まらぬ少女の芯の強さを主張するかのようだ。無論、艶のある黒髪にも乱れはない。仮に、絶対にあり得ないことだが仮に、依乃里が寝癖を付けたまま登校でもしようものなら学校中の話題になるだろう。それぐら

い依乃里の姿には隙も疵もなかった。

「おはようお母さん。今日は珍しく和の朝ごはんだね」

大盛のごはんと味噌汁に鮭の切り身。漬物各種とナスの揚げびたしに湯豆腐。この朝も多めの朝食を摂り、胃袋を膨れさせ、その体を暖める。

食事を終え、続く歯磨きも終え、朝のティータイムも毎日と変わらず、至って平穩に依乃里は食後の十分間を過ごす。優雅に紅茶を味わうその姿からは想像できぬその生理現象が訪れるまでの十分間が過ぎた。

きゆるるっ……ぐるるる……ぐるっ

静かにお腹が鳴動する。ぐるるとむずむずが依乃里の元に訪れる。これもいつもと変わらない。食事を経て本格的な目覚めを迎えた彼女の消化器官が忙しく活動をしているから当然のこと。(うんちしたくなってきた。今日もいつもどおりの時間だね)

今日も依乃里は朝に大便がしたくなる。大便をする。至極当然のことです。そうしない理由などあり得ない。便意があるということは、すなわち出すべき老廃物は既に直腸に詰まっていて、その時を待っているのだから。

依乃里はカップの紅茶を飲み干し、然るべき場所へ赴くために立ち上がる……その瞬間のことだった。傍らに置いていた依乃里のスマートフォンが着信音を鳴らし始めたのは。

「先輩、おはようございます。どうされましたか」

通話アプリの表示名は、依乃里が所属する生徒会での先輩。現在の中等部生徒会長のものであり、依乃里も威儀を正し応答する。

「あつ、依乃里ちゃん、朝早く電話しちゃってごめんね。実はね、さつき思い出したんだけど、今日のお昼までに出さないといけない活動申請書があつてね、わたし忘れちゃって——」

現会長も生徒会長として選出される程度には人望の厚い人物ではあるが、どちらかといえば、人を使い頼りその気にさせるのが得意な方であり、優秀な依乃里も相当に便利使いされていた。

「わかりました。お手伝しますから、朝のうちに仕上げてしまいましょう。私はいつも早めに登校してますから、気になさらないでください。いつもどおりなら八時には生徒会室に行けると思います」

書類の内容を詳しく聞いて、依乃里も観念したかのように申し出る。そう言うとき先輩からまるで救世主のように大げさに感謝され、依乃里も満更ではない表情で電話を切る。その一連の通話で三分ほどの時間を費やした。

ぐるぐるぐる……きゅ……くるるるっ

（お腹むずむずする。時間は余裕があるしちゃんと済ませないと）

依乃里も先輩の手伝いのために早めに出発しないといけないのは分かっているが、さりとてお腹の疼きは止まらない。通話をしていた僅か三分の間にも欲求が強まっている感覚があった。幸い約束の時間を守る想定であっても、まだ排便のための時間を確保することができない。健康のためにも確実に済ませておきたい朝の日課だから、諦めることなどできなかった。

いつもよりも気持ち早足でトイレを目指す。その扉を開き、今日も白く輝く洋式便器と対面する。便意に急かされ、止まることなく前に進み、スカートを捲る。レースで飾られた白色の下着を降ろす。

そこへ腰掛け尻のすばまりが水面を捉える。

「ふっ、んっ……んう……っ」

息んで、腹圧を掛けて、直腸に留まるそれを降ろす。元気なお腹は素直に応え、塊が動きいよいよ出口たる肛門を目指す。

（うんち……出る……っ）

いよいよ尻の粘膜を便塊が擦り始める。その直前のことだった。

「お姉ちゃん入ってるの!? お願ひすぐに代わって!」

慌ただしい足音が響いたかと思うと、妹の舞佳が焦燥と苦悶に満ちた叫びを上げる。予期せぬ事態に、開き始めていた依乃里の尻穴も収縮し閉じる。外へ出かかっていた大便も穴蔵の奥へ引っ込んでしまった。

「どうしたの舞佳? そんなに急いで」

「起きたら急にお腹痛くなってきた我慢できないのっ! 早くトイレ代わってよっ!」

言葉どおり舞佳はお腹を壊してしまったのだろう。扉越しになされる忙しない足踏みが切迫した状況を伝えていた。

「もう少しだけ待てない? あと、三分ぐらい」

「ぜったいむりっ! 下痢しちゃうてるの! ほんとにうんち漏れそうなのっ! ふっ、ううう……っ」

普段は依乃里と同じく品良く振る舞うことを心掛ける舞佳だが、まだ小学四年生である。お腹を壊して下痢をすれば、慎重しやかな言葉も所作も忘れ、幼子のように叫ぶのも無理はない。

（……わたしもうんちしかつたのに）

心残りは大いにある。出すべき質量を乗せたお腹が便器の誘惑に

惹かれ続けている。大便がしたい——けれど危機に陥った四歳も年下の妹を差し置き、ゆっくりと排便に勤しんでしまうほど依乃里は冷酷残忍ではなかった。

「すぐに出るから、もうちょっと頑張つて」

「ごめんねお姉ちゃん……うう、こんなことならアイス三つも食べるんじゃないかった……」

思わず母の言いつけを破ったことを自白する妹をよそに依乃里は立ち上がる。まだ大便は欠片も出せていないから、紙で拭う必要はない。ただ下着を穿き直しスカートを整えるだけ。そうして扉を開けると、両腕で下腹を抱え尻を振るパジャマ姿の舞佳の姿があった。顔色も真っ青でお腹の急降下は明らかだ。

「はあああ……っ！ もれるもれるもれるっ！」

大慌てで飛び込む舞佳を、憐憫の情とほんの少しの羨望が籠もった目で依乃里は見送った。

「うっっ!! ふううう……っ!!」

ビチビチビチブリリリリリイイッ!! ビチヂヂヂヂヂッ!!

ブウウウウーッ!! ブヂュルルルルルブビイイッ!!

忙しい布擦れの直後、舞佳の尻が派手に鳴る。下痢そのもの以上に下痢らしい音を撒き散らし、扉越しにもその下り模様を伝えてくる。依乃里と同じく毎朝快便ながら、どちらかといえば刺激に弱くやや下痢をしやすい体質な舞佳のことだ。到底、すぐに事を終えられる状態ではないだろう。

ぐるるるる……ぐうう……きゆるるるるるっ

(うっ……わたしもうんちしたい。変なところで止めたから余計

に……お腹が重い。むずむずが止まらないっ)

そうやってお預けを喰らってなお、依乃里のお腹は力強い蠕動を続けていた。便器に腰掛け寸前で出かかっていたものを止めてしまった分、渦巻く欲求はトイレに赴く前よりも遙かに強い。

「はああっ……!! おなかいいい……っ うっ、ああっ……!!」

ブジュルルルルビチビチビチッ!! ドボドボドボボボッ!!

(でも、この調子だと舞佳は五分、いや最低でも十分は籠もるはず。待つてから済ませても遅刻はしないけど、先輩の書類を手伝うなら早めに行かないといけないし)

朝食で弾みが付いた腸蠕動が更なる老廃物を直腸へ送り込み、腸壁が刺激され一層便意が高まっていく。そのように肉体は朝の日課を果たすべく元気いっぱい奮闘中だが、その主たる依乃里は時計の針を睨んでいる。余裕を持って起床する依乃里だから、この程度で朝のホームルームに間に合わないことはないが、先輩の頼みに応えることを考えれば時間の浪費はできない。

(はあ……うんちしたかったのに。取り敢えず出発して、どこかで済ませるようにしよう。途中で綺麗なトイレがあるといいけど)

結局、確かな便意を抱えながら、依乃里は自宅での排便を諦めざるを得なかった。出すべき重たいものをお腹の中に抱えたまま鞆を持ち、学校へ向けて歩き出すしかなかった。

焦りはある。思わず下腹を擦ってしまう程度には大便がしたい。それにこの日課を怠るのはいつぶりかも分からない。だからこそ不安は拭いきれないが、それでもまだ依乃里の表情は涼しげな雰囲気を保っていた。

## 二人の少女 すっきりの朝／むずむずの一日

ふと気が付くと、私の部屋に掛けられた時計の針は七時四十二分を指していた……も、もうこんな時間!? 急がないとっ!

ううゝまたやっちゃった! 今日漢字テスト、良い点取ろうって思ってた題範囲の復習をしてたらしいの間に時間が経ってた。大好きな趣味のお絵かきにしても、読書にしても、勉強にしても、普段は気が散りがちなのに、一度集中しちゃうとつい回りが見えなくなるのが私——草鹿陽菜の悪い癖。そのせいで今日も大慌てを強いられている。

はあ、ちゃんと早起きしたのに今日もギリギリだなんて。でも、今はよくよしている時間も惜しい。大急ぎでパジャマを脱いで、下着だけの姿になる。最近買ってもらったばかりの水色のブラジャーは、まだ慣れなくて窮屈に感じるけれど、大人のお姉さんに近付いているみたいで、誇らしさの方が勝つ。ショーツとお揃いのデザインなのもオシャレだよ。まだまだ五年生で顔も子供っぽいし、背もそこまで高くはないけれど。

もちろん鏡の前で一喜一憂している場合じゃない! 落ち着かず部屋の中をうろちよろ歩き回りながら、Tシャツとブラウス、そしてバステルピンクのカーディガンを順に羽織っていく。濃紺のハーフパンツに肌寒さを凌ぐためのタイツを組み合わせる。実のところファッションのことはあんまり分からなくて、お母さんに見繕ってもらったものだけど、お友達みんなにかわいいって言われたのが嬉しくて、つい選んでしまうコーデだった。おっと、髪に寝癖が残っ

ていないかも確認しないと。長い時間を掛けてシャンプーをしたりするのは、落ち着きのないと言われがちな私には難しいから、肩に届かない程度のセミショートをずっと維持している。体育の時とかも結ばなくていいから楽な髪型だ。

さて、時間は惜しいけれど持ち物チェックは欠かせない。ランドセルの中身と時間割を突き合わせる。今日は体育があるから体操服も忘れないようにしなきゃ。そして休み時間に絵を描くための自由帳と三十六色セットの色鉛筆は教科書よりも大切かもしれない。うん、これで多分大丈夫だよ。この前の通信簿にも忘れ物が多いって書かれちゃったし、ちゃんと確認しないとね。といって、持ち物チェックそのものを忘れてしまうこともあるのだけど……。

再び時計を見る。針は進んだけれどまだ七時四十五分。これなら余裕で間に合うね。でも、もう一つ大事なすべきことがある。

きゅるるる……ぐるるる……ぐうう……

そう、朝は決まって一日一度のうんちがしたくなる。今日もたくさん食べた朝ごはんの刺激でお腹がぐるぐるすると動き出して、つい足踏みをしたくなるような「むずむず」が体の奥から湧き上がってくる。一日分のうんちが今まさにお尻の穴を叩いて『そろそろトイレに行こうよ』って私を手招きしているみたい。

いつも元気にお腹いっぱい食べるのが私のモットー。それに、苦手なものはほとんどなくて、野菜だって大好きで、食物繊維? っていうのもたっぷり摂っている。給食も絶対残さず食べるから、その点は先生も褒めてくれる。だから、うんちは毎日すっきり出せる。毎朝うんちがしたくなる。

快便って言うのかな？ 健康なのはいいことだね。だって、お便秘をしたら、ごはんもおいしく食べられないんだもん。去年、骨折をして入院中にお便秘になっちゃった時は本当に大変だった。お腹がずーんって重くて、段々ごはんも喉を通らなくなつて、最後は浣腸をされちゃったし……。

もちろん普段はお便秘なんてならない。うんちがしたいから、自室を飛び出しおトイレに向かう。でもこの家では、朝のうんちは急がないといけない。だって……。

「お姉ちゃんまだ!? 私、そろそろ出ないといけないんだけど!」

「り、梨奈ちゃん、ちょっと待ってね。まだ、出るから……っ」

高校一年生の杏那ちゃんと、中学二年生の梨奈ちゃん。私の二人のお姉ちゃんも、朝ごはんの後はうんちがしたくなる。マンションであつて、トイレが一つしかないから、今日みたいに運悪くタイミングが被ると一大事だ……二人共か、少なくとも一人はとつとすつきりしているはずだつて思つたのに!

「ふっ……んんっ……んううう……っ」

にちにちにちにちちちっ! ぶりぶりりりっ! どぼんっ!

今、私を含む妹二人を差し置き息んでうんちをしているのが杏那ちゃん。おっとり屋さんで、朝のトイレもじつくり時間を掛けてするから本当に困っちゃう。

「はあ……時間ないのに」

そして杏那ちゃんに遅れを取ったか、じゃんけんに負けたのか、扉の前でとんとん足踏みしながら待っているのが梨奈ちゃん。朝のトイレはすぐに済ませてくれることが多いけど、たまにお腹を壊し

て長く籠もることがあるから油断はできない。

そんな三人の姉妹で一つのトイレを使う必要がある。私が末っ子だから優先して使えることも、譲らないといけないこともなく、朝うんちの順番は早い者勝ちで、同時ならじゃんけんをすることになる。

「陽菜ちゃんもまだうんちしてないの?」

制服の上からお腹を擦っている梨奈ちゃんが聞いてくる。杏那ちゃんが出てきたらすぐにうんちができる二番手の立場が羨ましくて、つい強気に答えてしまう。

「まだしてないよ! 時間ないしできれば譲ってほしいぐらい」

「今日は無理! 私だって時間ないし、ちょっとお腹が……っ」

……梨奈ちゃん、昨日も脂っぽいとかつをいっぱい食べてたもんね。

「またお腹壊したの? 大食いの梨奈ちゃんはしょうがないなあ」

「うるさいっ。陽菜ちゃんだって昨日いっぱい食べてたじゃん」

「わたしはお腹強いから下痢ピーしたりしないし」

きゅううう……ぐるぐるぐるぐる……っ

そう、下痢をしちゃった時の汗が噴き出るようなお腹の痛さとか、お腹がドロドロで熱い感覚はない。ただ『うんちがしたい』だけが迫って来ている。いつものバナナうんちが『まだですか?』ってしきりにノックをしてきている。その度に私は『もうちょっと待ってね』を伝えるために、お尻をきゅっつと閉める。

やっと杏那ちゃんがウォッシュレットを起動した音がする。多分、梨奈ちゃんはゆるいお腹をすつきりさせるのに時間が掛かる。それ

らを計算しながら左手首のデジタル腕時計を見た——小学生で腕時計をしている子なんて珍しいし、大人っぽいよね。つい時間を忘れがちな私だから、お母さんがブレイゼントしてくれたもので、出掛ける時はいつも付けているお気に入りだ——時刻は七時四十六分。つまり今から二人のお姉ちゃんを待ってから私がうんちをする時間はほとんどない！

一緒に登校する桜子ちゃんのお家に行くのは毎朝七時五十五分と約束している。今から梨奈ちゃんと私がうんちを済ませる時間と、桜子ちゃんの家まで走っていく時間を考えれば、どう考えても今からじゃ間に合わない。

朝だからすぐうんちがしたい。でも、約束を破るのはよくないし時間はちゃんと守らないと。いつも忘れるくせに、遅れるくせについて言われたら全然反論はできないけど、分かっているのに決まった時間どおりができないのはとても気持ちが悪い。矛盾してる気がするけど、私にとってはそういうものなんだ。

うんち、どうしよう……学校終わってお家に帰るまで、我慢するのはすごくしんどい。はあ、学校で済ませるしかないのかな。

学校でうんちなんて、本当はしたくない。だって、他の子にうんちをしてるって思われただけでも恥ずかしいし、個室の外から『あそこ長いけど大かな』『なんかにおいするね』『陽菜ちゃんがうんちしてる』なんて言われた時には顔がたまらなく熱くなる。私はうんちする時、つい声を出しちゃうから、からかわれちゃう可能性が高い。『幼稚園児みたいにうーんってしてる』って笑われた時にはちょっとだけ泣きそうになっちゃった。ついでに和式が多いのも大減点ボ

イントだし、洋式であってもウォシュレットなんて望むべくもない。もちろんたまたまお腹を壊しちゃった時とか、今日みたいにお家で済ませられなくてどうしても我慢できない時は勇気を出してするしかないんだけど……できれば我慢をしたい。お家の安心できるトイレですっきりきもちよくうんちをするのが一番だ。

「ごめんね梨奈ちゃん。あつ、陽菜ちゃんも待ってたんだ……」

「もう遅いよっ！」「杏那ちゃん、ゆっくりしすぎ！」

二人の妹に非難されながら、杏那ちゃんがトイレから出てくる／すぐに代わりに梨奈ちゃんがトイレに入る。もちろん早い者勝ちのルールに変更はなく、出遅れた私はトイレを使わせてもらえない。

「はああ……ふうっ……うっ……！」

ブリブリブリリリリリリッ！ ブチュルルルルルッ！

ブウウーニユルルルルルッ！ ニチュルルルッ！

聞こえてくるのは、さっき聞いた杏那ちゃんのそれよりも軟らかくてドロっとしたうんちを想像させる音。この調子だと梨奈ちゃんも絶対いつもより時間を掛けるはず。もうこの時点で出発前にお家でうんちができないのは確定してしまった。

ぐるぐるぐるきゆるるうーっ

けれどうんちを出したいお腹は黙っていない。うんちがどんどん降りて来ちゃってる。すっきりうんちをするのには最高のタイミングなのにっ！ お腹を壊してはないけど、つい梨奈ちゃんがしてたみたいにお腹を擦ってしまう。意味もなくトイレの前を歩き回ってしまう。

あと三分だけ余裕があれば、トイレでうんちができたかもしれない



い。だから後ろ髪を引かれる思いは大いにあった。けれど腕時計の数字は構わず進んでいくばかりで、もう普段の出発時刻の七時五十分は過ぎている。仕方なく諦め、部屋に置いてあった水色のランドセルを背負い、私は登校のため玄関に向かった。

「陽菜、もう行くの？ 今日忘れ物はない？」

お母さんも私の忘れ物癖と集中癖は分かっているから、色々と口うるさく聞いてくる。もう十一歳だし、五年生だし、大丈夫って言いたいけれど、悲しいかな忘れ物も集中のし過ぎもしょっちゅうだから、甘んじて受け容れるほかない。

「ちゃんとチェックしたから大丈夫！」

本当に大丈夫だよな？ 宿題も持ったし……。

「うんちは出たの？ 済ませなくて大丈夫？」

もうっ、そんなことまで聞かなくていいのに！

「し、してないけど……だって、杏那ちゃんも長いし、まだ梨奈ちゃんもトイレ使ってるし、時間ないし……」

でもこれは図星だ。大丈夫だと言いつつ切ったけど、言葉を濁してしまふ程度には、お預けを喰らっている便意は強かった。

「桜子ちゃんに遅れるって電話してもいいんだからね。去年みたいにまた学校で我慢して——」

「っ、もう学校でもちゃんとうんちできるもんっ！ い、いいから行つてきますっ！」

わざわざ去年の失敗まで持ち出さなくていいのに！ お母さんは、去年私が学校帰りにうんちを我慢できなくて……おもらし、しちゃってから、事あるごとに『トイレは大丈夫？』だなんて聞いて

くる。もうそんな子供じゃないのに！ あ、あの時は、我慢できそうだって思っちゃった、その、事故みたいなものだし！ 本当に我慢できない時はちゃんと学校でもうんちできるもん！

＊ ＊ ＊

「桜子、これからトイレなの？」

ママが時計に目を遣りながら問い掛けてくる。時刻は七時五十分過ぎ。朝の支度でドタバタして、思ったより時間がないのは否定できないけど余計な心配だ。私はちゃんと時間の管理だってできる。だって十一歳だもん。五年生だもん。背はこの一年でぐんと伸びたし、最近では毎朝自分で起きられるし。

「大丈夫、まだ時間あるしっ」

急ぎ足で私は玄関……ではなくそのすぐ傍のトイレに向かう。おしっこは寝起きに済ませたから次は大きい方——ウンチがしたい。今日も一日一度のウンチをしないとけない。

きゅる……ぐる……っ

ウンチがしたい。といつてもそれはまだ切実なる願望であつて、便意はごくごく薄いものでしかない。それこそ今は無視しようと思えばそのまま登校してしまえるほど。自覚がある程度には不器用な私は、五年生になつてから自分でやるようにしている寝癖直しにしても、いつもの二つ結びを作るのにも時間が掛かって、朝ごはんはかき込むように済ませてしまつたし、その後の身支度にしても持ち物の準備にしても、迷つたり小さなタイムロスを重ね、結局は落ち

着ける時間が全然なかったから、お腹もまだまだウンチを出していいってモードになっていないのかも。朝食をゆっくり食べてまったり過ごしていると、すぐにいい感じの便意が来るのに……忙しくて今日はそんな余裕のある時間は全くというほど取れなかったから。

焦る気持ちを抱えながらトイレに至る引戸を開ける。まだ便器に惹かれる状態ではないけれど、ウンチのために取れる時間は五分もない。少しでもお腹が活気づくように、トレナー越しにお腹を撫でてみる——英文字の書かれたポップなデザインをした水色のこれは私のお気に入り。その布地の上に右手で円弧を描きつつ、便器にお尻を向ける。

ギンガムチェックのスカートを捲り上げる。どちらかといえばスカートの方が女の子らしくて好みだけれど、丈は長めのものはトイレの時に気を付けないといけない。私は何事も“つついっさり”が多いから……汚さないよう細心の注意を払う。お家のトイレならそこまで気にしなくてもいいけど、外のトイレは汚いところも多いからね。

次いで桃色のジュニアショーツを降ろしていく。トイレに行く度に目に入る大切な場所に生えた毛は、まだ少ないけれど日増しに数が増えている気がした。そろそろ生理だねって学校にもナプキンを持つていくようにしているけど、胸の小さな膨らみにも、宿泊学習のお風呂で他の子にちらちら見られてすごく恥ずかしかった毛にも、まだまだ違和感を抱いてしまう。

……ともかく今はウンチを出すことに集中しないと。温かい便座に深く腰掛け、お尻の穴を向ければ準備は万端のはず。

「ふっ、んっ……んん……っ」

そして息を詰め、踏ん張ってみる。学校で習った腸の形に沿ってお腹を撫でてみる。

ぐるるる……きゆるるる……ぐるっ

あ、来たかもっ！ でも、すぐに出てくれる雰囲気じゃない。それどころか、こっちから掴みに行かないと、すぐに逃げ出してしまいうような小さな便意しか今はない。もつと頑張つて、朝のウンチ、ちゃんと済ませないと。

「うんっ……んっ……んん……はあっ……ふっ……ん」

うう……中々ウンチが出てくれない！ ウンチでお腹の下の方が重たい感じがするし、ちよつとぐるぐるしてるし、絶対ウンチ降りて来てるのに、出口まであと一歩届かない！ あんまり時間ないんだから、はやくウンチ出てっ！

「っ……ん……はっ……ふ、ん……っ！」

ぶうう……ぶびびびっ！ ぶすううーっ

派手なおならも出たけど、肝心のウンチが出ない。朝ごはんでお腹は動いているし、お便秘なんてしたことがないすつきり体質だから、きつとしばらく待てば、嫌でもウンチはしたくなる。登校で歩いているうちに催すか、遅くとも一時間目のチャイムが鳴る頃にはお腹のむずむずが止まらなくなる——だけどウンチは今しないといけない。だって、ウンチはお家のトイレでしたいから……学校のトイレでウンチなんて絶対、絶対したくないから。

学校でウンチをするなんて、想像するだけで顔が熱くなる。音や臭いで他の子にもしてるってバレバレだし、水を流しながらしても、

結局籠もっている時間や雰囲気でなんとなく分かってしまう。私もトイレで並んでいる時に『あそこはウンチしてるな』って察しちゃうこと、時々あるし。もちろんそんな時、口が悪い子や意地悪な子は決まって『臭いね』とか『ウンチしてる』とか『ぶりぶり聞こえる』とか言ってくる……もちろん個室の方に届くぐらいの声の大きさで。からかったりしない子の方が多し、お腹を壊したら心配してくれる子の方がどちらかといえば多数派だけど。それでも臭いの残った個室を譲ると誰だって嫌な顔をする。私だって、嫌な顔をしてしまっているかもしれない。そんな時は『大きい方してたから臭いかも』ってちゃんと言わないと、下手をすれば後で教室で噂話の的になってもおかしくない。

だからみんな学校ではウンチがしたくない。みんな、どうしてもしたくなかった時はこそこそ、すっごく恥ずかしそうに済ませる。堂々とできる子は少数派で、お腹が痛いのにわざわざ遠いトイレまで我慢する子だって珍しくはない……私も学校でウンチがしたくなっても、絶対にお家まで我慢すると心に決めている。どうしても我慢ができない時は一世一代の大犯罪に挑む覚悟で息を殺し済ませる。からかわれた時に、うまく受け流して笑いに変えたり、力強く反論するだけの器用さやコミュニケーション能力は持ち合わせていないのだから尚更だ。

そして幸か不幸か、私のお腹はすこぶる健康で毎日ウンチがしたくなる。そんな私がお腹の心配をせずに学校で一日を過ごすには、朝にお家でウンチを済ませてしまうのが一番だし、朝に済ませないと絶対学校に居る間にウンチがしたくなる。便意を抱えながら授業

を受け、お友達とおしゃべりをして、休み時間には恥と欲求をガタガタ揺れる天秤に掛けることになる。

だから、今日みたいにうまくウンチが出ない日は大変だ。大抵、朝は時間がないから、一緒に登校する陽菜ちゃんは時間どおりに迎えてくれるからすごく焦っちゃう……焦ると余計に出なくなるのに。

「んんっ……んんっ……っ……はあっ……」

うう……やっぱり今日は普通に息むだけじゃウンチ出してくれない。でもお腹重たいし、出せなかったら午前中のうちに絶対に催しちゃう。したくなっちゃう……！ こうなったら、もっといっぱい頑張るしかない。

お姉ちゃんに聞かれたら絶対からかわれるし、ママに聞かれたら変に心配されちゃう。けど、やるしかない……っ！

「ふうう……んんっ！ んんっ！ うんっ、ううんんっ！」

膝の上で手をぎゅっと握る。足の爪先まで下半身の全部に力を入れて、そして大きな声を出して踏ん張っていく。まるで幼稚園児みたいですっごく恥ずかしいけど、これが一番お腹に効くって分かっているから。

ぐるるるるきゅるる……っ！ ぐうう……っ！

「ふうううんっ、んううう……っ！ うんっ、うーんんっ！」

コツはためらわれないこと。お腹のぐるぐるに心の耳を澄ませ、力を入れて、だけど体から力を抜く。ただ「うんちをする」ことに集中して、思い切りうーんっとする。

「ウンチ出たえ……っ！ うーんんっ！ ふんんうう……っ！」

## 下痢という名の日常、朝の非常事態

古川千夏はスマートフォンのアラーム音で目を覚まし、眠い目を擦りながら、ベッドから這い出ていった。

夜更かしのせい、閉ざされたカーテンの隙間から差し込む朝日を恨めしげに見つめるが、既に起床時間は五分過ぎているからやむを得ない。まだ眠たげなその相貌はどこか幼げであり、しかし知的でダウナーな雰囲気もまた滲んでいる。

Tシャツにジャージを組み合わせたかわいげのない部屋着を脱ぎ捨てて。晒された肉体は小学生と見紛うてもおかしくはない短軀であり、期待を込め迎えた今年の健康診断でもついに百五十センチメートルには満たなかった。中学三年の春と比べても変わらなかったその数値について、千夏は完全に諦めてしまっている。

そんな子供じみた体型に相応しく、女性的な膨らみというのは、上半身を見ても下半身を見ても至って控え目であって、僅かに見える腰のくびれが精一杯もう幼子ではないと主張する。むしろ脂肪よりも四肢の筋肉質さの印象が強く、それは部活動での長距離競技と趣味として取り組む登山の賜物であった。

(さて……今日はどうしようか。入学前は私服で気が楽だとは思ってたけど、今思えば取り敢えず制服を着ていればよかった中学時代が懐かしい)

まだ十六歳。しかし高等専門学校に通い工学を修める「学生」という立場である千夏は制服を持ち合わせず、私服の選択に迷う日々を送っている……といって、飄々としてどこか浮世離れた性格の

千夏であって、そう服飾に関心を抱いていない。だから最低限度の清潔感を確保できればよいとの考えであって、季節ごとに着回す服は必然決まってくる。十一月上旬の今は、飾り気のない紺色のパーカーと地味なベージュのズボンが定番スタイルの一つだ。髪の毛も手軽に済ませ、肩口ほどの長さのセミロングヘアが櫛に梳かされ踊る。

簡単な身支度を済ませると、洗顔と小用を済ませ、リビングへと移動する。挨拶はなく無言のままダイニングテーブルへ。父は遠方へ単身赴任中であり、研究職である母は千夏の起床する一時間以上前に出掛けており、そして千夏は一人っ子である。

だから一人の朝食にも慣れっこだ。今日はトースト一枚と冷蔵庫に保存されていた蒸し鶏と人参サラダを食し、一杯の白湯を飲み、そして一人「ごちそうさま」を呟く……お腹が膨れて、胃腸が本格的に目を覚まし、過剰なほどの蠕動が始まる。

ギュルルルルル……グルグルグルル……グギュルルル……ッ  
その感覚が訪れたのは食後の歯磨きの最中。千夏は洗面台の鏡に映る顔をしかめたが、そこに焦燥はなく、辟易すらなく、その表情はあくまでマイペースを崩さない。

(うんこしたい……お腹痛くなってきた……)

刺々しい欲求はどう考えても健全とは言えない。泥状のそれを想起させる痛みと行為を急かす強い便意が渦巻く——千夏のその腹腔の中で緩んだ糞便が駆け下ってゆく。

(ゆるいうんこしたいっ、トイレ……ッ)

快便というには強すぎる便意がそこにある。正常運転のお腹には

あるはずもない痛みが迫る。しかし焦らず歯磨きは丁寧。口をすぎ、デンタルフロスでの掃除まで終えてから、千夏は不浄の場へと急ぐ。そこへ繋がる扉は洗面所にもほど近く、すぐに彼女は洋式の便器と対面することができた。程々に清掃もなされ、温水洗浄便座も備えたそれがあるから、これから為すべきことに何の不足もない。思う存分に千夏は大便ができる。

グウウウウーググウルルル……グルルルルル……ッ

もう目の前に便器があるというのに、大小腸は構わずに排泄を強要し続けた。だから千夏は、分かっている、少しは待てと言わんばかりの気怠げな表情で早々にズボンと下着を降ろす——清潔が保証されている自宅のトイレだから、くるぶしまで下げてしまっても気にならない。またその流れで腰を落とし便座へ腰掛ける。小柄ゆえにちょこんと座るといふ表現がぴったりで、小ぶりの尻が陶器に湛える封水をしつかりと捉えていた。

「ふっ……うっ……」

ぶううう……っ！　ぶびぶびぶびっ！

直後、失敗した管楽器の演奏に近い音が響く。不調の腸管には当然ながらガスも溜まりやすく、派手な放屁も至って自然なことであらう。拡散し漂う腐卵臭も、その腹具合を写し取る鏡のようだ。

（うっ、くさい……ガスも今日は結構溜まっているかも）

少し捲り上げたパーカーの下。滑らかな肌の下に詰め込んだ臓物が不調をきたしている。消化と吸収のプロセスを大幅に省略し、それゆえたっぶりの水分を含んだ泥が下り、出口に向かって殺到している。その身が強張り震えると、すぐに事は始まった。

「っ、うううっ……！」

ブリブリブリリリリリッ!!　ブチュルルルニユルルルッ!!  
猛圧にこじ開けられた尻穴から茶色が進る。軟便が溢れ、次々に便器へと落ち水面を汚辱の色へと染めていく。軟らかく不定形で正常な消化を露も感じさせぬベトベトうんちを千夏はたっぶりと吐き出した。

「くっ、ふっ……ふう……っ」

ブウウウウーッ！　ブリュリユリユリユブチュチュッ！

ブビビッ、ニチュルルブジュジュッ！　ユルルルルルルッ!!

腐敗ガスと熟成不足の黄土色が最低を奏で続ける。軟便もすぐに水気の多い泥状便へと変わり果て、それを受け止める便器の封水は既に底が見えぬほどに濁りきっていた。

（今日もゆるい……どろどろのうんこ、まだ出る……っ）

たっぶりの緩んだ糞便を下らせ、過剰な蠕動に由来する痛みが這い回り、思わず千夏も下腹を撫で擦る。それで腹具合が落ち着くことなどそうないとは経験上分かっている、ついしてしまう所作であった。

「うっ……っ、う……ふうう……んっ」

ビュルルルユルユルユルルルルッ……ブウウウウッ！

ブビッ！　ブビビビッ……ブリリリリッ！　ブジュルルルッ！

何度も何度も肉門が隆起し、絶えず泥を便器へ注ぐ。下痢とまではいかずとも、決して健全とはいえないそれを尻穴から吐いていく。立ち込める悪臭の中、千夏は依然涼しい顔のまま息を詰め、腹の身を絞り出していく。

(うんこ、全部出しちゃわないと。またお腹痛くなるのやだし……) 無論、全部を出し切るのが大前提。さもなければ、通学の最中にトイレに駆け込む確率が四十パーセント。朝の校舎のトイレに籠もる可能性が三十パーセント。一時間目のうちに挙手をする確率が二十パーセント。残るは忘れた頃に急な腹痛に見舞われる可能性が十パーセント——いずれにせよ腹の中身を空にしなければ、また千夏は便器を求め苦しむことになる。

「はあ……ふっ、うっ……!」

ブチュルルルッ……プリリニチュルルルッ……ユルルルッ!

ブウウウウウッッ! ブチュルルルルッビビッ……プリュッ!

だから一度噴出が落ち着いても油断はできなかった。腹の内に残る不快が、単なる痛みの残滓なのか、あるいはまだ出すべきものが眠っているのか、その判断が付くまで千夏は便器に縛られる。

「ふっ、んっ……んんっ……はああ……っ」

何度か尻穴をひくつかせ、息んでみせて、それでも出るものがないとなつて、ようやく千夏は安心できる。すっきりとは言い難いが、ひとまず今日も朝の日課を終えたと確信する。

泥の糞と腸液に塗れてらつく肛門の直下。そこに広がる光景は見るに堪えない。軟便と泥状便は簡単に水に溶け、便器の封水を破壊的なまでに汚していた。目を凝らして見れば、その茶色い汚水の下にポロポロに崩れ広がる糞便を認めることができる。ヘドロに近しく強烈な悪臭を放つそれが、少女の腹の内にあった。これだけのものが暴れ狂っていた。その不調は推して知るべし。

(今日もゆるいうんこだったけど……下痢じゃないしそんなに調子

悪くないかも。この感じなら学食の豚骨ラーメン、食べちゃっても大丈夫かな?)

だが千夏当人はこれを不調としない。これだけ軟便と泥状便を吐いておきながら、下してしまったとも、お腹の具合が悪いとも考えることはなかった。この程度は普通であつて、酷く下痢をしなければ正常運転の範囲内。猛烈に下しトイレに籠もるのは日常茶飯事で、出先で堪え難い腹痛に見舞われ、不浄を探し彷徨い駆け込むことだって珍しくはない千夏だから。どうしようもなくお腹が弱い千夏のことだから。

朝の軟便と泥状便ですらモーニングルーティンに組み込まれていた。寝起きでの大小腸の目覚めと、朝食による力強い蠕動は、千夏の貧弱なお腹には過剰な刺激だから、寝起きか食後かその両方か、ともかく朝は必ず大便がしたくなる。刺激に驚き慌てた大腸が消化途上の糞便も無理矢理に送り出すから、調子が良い時ですら軟便気味の排便を強いられ、ピーピーの下痢で出発ギリギリまでトイレのお友達なんてこともままある。毎朝だが快便とは言い難く、時に彼女を苦しめ苛む、呪いじみた日課であつた。

(やつぱり家のトイレが一番……ウォシュレットあるし)

この体質については千夏も半ば達観の念があるのか、一喜一憂すらなく、そう思い悩むことはなく、静かに温水洗浄便座のスイッチを押下する。キレイのいいパナナうんちなど年単位で出していない千夏だから、じつくり温水で洗うのが常であつて、それでも水気を拭う紙には茶色が付くから、しっかりと拭き清めるようにしている。

溶けた紙を浮かべ一層見た目の醜悪を増した便器に水を流し、汚



物の全てを下水に送り、これで彼女の用は済んだ。全て終えるまで五分を要したが時刻は問題ない。むしろこの後二度目の腹下しに至り、便器からしばらく離れられなくなる事態となっても遅刻はしない程度の余裕をもって起床していた。

（そうだ、アレを忘れるところだった。まあ、効いてるか分からないけどお守りみたいなものだし）

表情を変えずリビングに戻り、常温保管のミネラルウォーターと共に白色の錠剤を嚥下する。これは乳酸菌を主とする整腸剤で、腸内の善玉菌を増やしその環境を改善する医薬品である。効果のほどは定かではなく、千夏は毎食後にこれを服用するが頻繁に腹を下すのは変わらない。

そうして彼女はリュックサックを背負い自宅を発つ。少しどころではなくお腹に不安を抱えたままだが、そもそも千夏のお腹に不安がない日など皆無であって、動じることなく彼女は歩いていく。

醒めた雰囲気もある表情ながら、といって彼女は日々を楽しみ生きている。まだ一年次ゆえ専門的な内容は少ないが、毎日の講義は新鮮だった。少ないながら友人にも恵まれ、今日は部活動もある日であって、全力で体を動かす腹づもりであった。その一方インドアな自分も好きで、今日の夜はどのアニメを見て夜更かしを犯そうかと今から胸を躍らせる。通学路へ赴くその足取りは、不調の陰など欠片も感じさせぬ軽やかなものであった。

\* \* \*

幼少の頃から、千夏はお腹が弱かった。大小腸は極めて貧弱であって、十六歳となった今も些細な刺激でお腹を緩ませ下痢をする。下痢をすることを強いられる。いつどこでも下痢は襲い来るもので、その度に千夏は便器を求める絶対的弱者へと成り下がる。その飄々とした表情を滅茶苦茶に歪ませることも時にはある。

毎朝決まって出る軟便や泥状便など気にも留めることなく、むしろ好調とすら言うかもしれない。本当に酷い時には、早朝から遅刻寸前の時間まで、何度も何度も尻を鳴らすことだってあるのだから。出先でもトイレの場所を常に把握するのは当たり前。電車通学だから、途中の停車駅も含め全てトイレの場所や混み具合は把握している。実際、いつ何時そこへ駆け込んでもおかしくない。

授業中の中座も稀ではない。授業を最後まで受けようと、恥を避けようと頑張ってはみるのだが、努力も虚しく便器を求め教室を飛び出すことも時にはある。無論、彼女の体質のことはクラスメイトに露呈していて、優しく離席中の分のノートを見せてくれる友人の存在が救いであった。

そこには恥もある。常人には計り知れぬ苦しみがある。まだ小学生だった頃は、頻繁に学校のトイレで下した排泄を強いられて、個室の外から陰口を叩かれ、幾度となく涙を飲んだ。からかわれるのが嫌で、授業中に限界寸前まで我慢をすることもしばしばだった。四年生の時分、自らの限界を見誤り、全校集会の最中に大失敗をしかした最低の記憶は、今でも時折夢に出る。社会科見学のバスに予定外の休憩を強い、一人トイレに駆け込んだ折に向けられた軽蔑は忘れられない。あらゆる検査を消化器内科で受けて、尻穴から内視

鏡に入れられる辱めまで受け容れ、それでも原因が分からずただの体質だと知らされた時はひどく落胆したものだ。身長伸び悩みの、下痢による吸収不全と考えれば、身体測定はいつも惨めなものだった。そうやって真剣に悩み苦しんだ時期も確かにあった。

それでも千夏は負けなかった。幼馴染の友人に支えられ、励まされ、下痢をからかわれても泣かなくなった。長距離走や登山に取り組み、下痢は治らずとも生来の病弱を克服できた。よく出掛ける先のトイレの場所を徹底的に覚えた。もしも失敗をしても自分で後始末ができるようになった。

そして中学に上がる頃には、ままならない宿命を受け容れていった。どこか達観し何事にも動じぬ性格が形作られ、今の千夏がある。腹痛と下痢からはどうやっても逃れられないが、千夏はマイペースに日々を楽しんでいる。時に顔を青ざめさせトイレに急ぐが、時にビービーの腹下しに憔悴することもあるが、千夏はそれすら受け止めて生きている。

ギュルルルルグルルル……ピイイ……ゴロゴロゴロロロッ！

だからといって、いざ不調に陥る際の苦しみが減るわけではない。まさに歴戦の腹下し戦士たる千夏の心は冷静だが、さりとて乱れきった消化器官は急転直下の大騒動。そんなことはいくらでもある。

ギュルルルルゴロゴロゴロロロッ……グウウウウウウ……ッ！

(まずい……お腹痛い、完全に下してる……下痢のうんこしたいっ)

今日一日の学業を終え、部活動では二週間後に迫った大会のため三千メートル走の練習に励み、今は夕焼けの照らす家路を歩く時分。その最中で千夏の腹は猛烈に下り始めた。下腹が唸り、異常な蠕動

による痛みが差し込み、便器が欲しくてたまらなくなる。千夏にとって日常的な非常事態が、その小さな体の内で巻き起こっていた。(家まで持つかない……いや、ちょっと、まずいかも。コンビニのトイレ、使わせてもらおうかな)

下痢の便意は劇的に進行するもの。それを身に沁みて分かっている千夏は無理をしない。自宅まで歩いてあと十分ほどであるが、直近に見えるコンビニエンスストアの看板をゴールに定めるのに迷いはなかった。もちろん、過去数度に渡りトイレを借りたことのある場所だ。

「ふう……っ……うっ……」

ゴギュルルルルグルルルルル……ギユルオオオオ……ッ！  
(はああ……これは下痢しちゃってる。やつぱり、豚骨ラーメンの脂、よくなかったのかな。キンキンに冷えたエナジードリンク、あれも多分原因っぽい……)

日の沈みかけた秋空の下、千夏は季節外れの汗を額に滲ませ、目指す便器へ向けて歩調を速めていく。脳裏を巡るのは、昼に学食で食べた脂多めの豚骨ラーメンのこと。あるいはその後、友人と共に一気飲みしたカフェインたっぷりのエナジードリンクのこと。どちらも『今日は割と調子がいいから』と胃袋へ投じたものであったが結果はこのとおり。消化器官からの猛抗議が、下痢という彼女にとってありふれた形式で突き付けられていた。

(うんこしたい……っ！ トイレ、トイレ、トイレっ！)

思わず下腹を撫でながら千夏は、年中無休でトイレを貸してくれるありがたい場所へと足早に飛び込んでいく。何度目かも分からぬ

完璧クール少女だって便意限界おトイレ懇願！

快便ガールもバナナうんちを駆け込み大放出！

お腹が弱い子は下痢便決壊ギリギリアウト！

糞便に責め立てられ  
限界の欲求に苛まれ  
便器という救いを乞う

少女たちの叫び/後悔はただ一つ

～朝のうんちはガマンできないっ！～

これは日課たる朝うんちを済ませ損ね  
強烈な便意に見舞われ翻弄される少女  
たちの物語

小説  
イラスト  
A J  
うのると  
麦茶

制作サークル  
少女排泄表現開発事業団